

『ドゥーデン、ドイツ語と外来語の正書法』第十五版(マンハイム)

*Duden, Rechtschreibung der deutschen Sprache und der Fremdwörter. Jubiläumsausgabe, 15. erweiterte Auflage, völlig neu bearbeitet von der Dudenredaktion unter Leitung von Dr. phil. habil. Paul Grebe. (Der Große Duden, Bd. 1). 794 S. Verlag Bibliographisches Institut, Mannheim 1961.*

橋本郁雄

aufgrund は公認の表記ではないときめこんでいたので、ウルスヘーファー<sup>(1)</sup>氏が『Der Deutschunterricht』のある号の序文の中でこれを用いているのを読むまでは、その正書法を確かめるのを怠っていた。確かめる気になったのは、おそらく所載誌が正書法改革問題の特集号であったせいでもあろう。そして aufgrund がマンハイム(西独)刊行の『ドゥーデン』十四版(一九五四年)にはじめて見出語として採録されていることを知ったのであったが、その後一九五七年に出たライプチヒ版すなわち『東ドゥーデン』十五版では、「普通の正書法に適わない」形としてしりぞけられた。しかし新しいマンハイム

版(十五版、一九六一年)は、十四版と同様、aufgrund を「今日しばしば用いられる」書法として auf Grund と並んで見出語に選んでいるのである。

さて、分ち書きにするか、複合語にするか、大書か小書かは、ドイツ語の正書法上最も厄介な問題であって、その煩雜さ加減は、名詞の頭文字の大書廃止論に一つの論拠を与えているほどである。たしかに in bezug auf—mit Bezug auf, radfahren—Auto fahren, schuld geben—Schuld tragen など並入たてられると、「むずかしい正書法のために小学校の教育はたえがたい重荷を負っている」という正書法改正論者の批難も、あながち誇張ではないと思われる。実際、正しい——正書法に適った——ドイツ語を書くためには、正書法辞典なしにはすまないであろう。

また分綴についても、一応の規則は心得ていても、こと外来語となると、語綴(Sprachsilbe)によるものあり、音綴(Sprechsilbe)によるものありで、迷うことが少なくない。たとえば Pädagoge, parallel Korrespondent などは語綴により、Epi-sode, Transit, ab-strakt などは語の構成によらず、音綴に従って分綴するのだから、厄介というほかはない。正書法辞典によってくちがいの生ずることもあるけれども、疑義が起れば、正書法辞典で確かめるのが安全である。

連字(Ligatur)に対する一般の関心は、分綴法どころではなく、たとえば教科書にさえその誤用が目立つほどであるが、僅かの注意で誤用を防げるのだから、分綴同様に、校正者は心

すべきである。たとへば Auffassung や auffallen などは F になつては行けなからし、FeiBig の F は連字だが、reiflich や Auflage では違ふ。しかし後者の略語は Auf. となる。連字か否かは、一々辞書をひくまでもないことであるが、万一迷うようなことがあれば、正書法辞典を繕げばよい。

さて、正書法という点、『ドゥーデン』とどうことになる。正書法辞典にはいろいろあるけれども、『ドゥーデン』が一応公式の規準として政府にも認められ、普及して、ほとんど標準語辞典の代名詞のようになってゐることは周知のとおりである。しかし第二次大戦後、正書法改革の気運が澎湃として起こり、各種辞典の著者が、自らの正書法を自分の辞書を通じて主張しようとする傾向がよくなつて、長年の苦闘の末かちえられた統一の書法が、一時危殆に瀕したことがある。そこで一九五五年十一月十八日、十九日の西独各州の文相会議は、正書法改革の問題を議し、さしあたり、一九〇一年の正書法改正に基づく書法乃至規則が、今日なお拘束力をもつことを確認し、疑わしい場合は『ドゥーデン』(マンハイム版)に拠るべきことを決めた。そして同年十二月十五日付官報で、この決議を公示したのである。一方、東独においても、一九五九年以降、学校ならびに印刷業者に対して、正書法は『ドゥーデン』(ライプチヒ版)に準拠すべきことが定められた。すなわち、『ドゥーデン』は東西両ドイツにおいて、ともに国家的に支持された正書法辞典となつてゐるのである。しかし、もともと『ドゥーデン』は一民間人の著述であつた。ギムムナージウムの校長コン

ラート・ドゥーデン著わすところの正書法辞典 Vollständiges Orthographisches Wörterbuch der deutschen Sprache, 1880年、ジープスの『舞台発音』(Th. Siebs, Deutsche Bühnensprache, 1898)とともに、新高ドイツ語の文字と音の形式を確立した、世紀の転換期における記念碑的著述であつた。いまここに正書法辞典『ドゥーデン』の歴史と功績について多くを語る余裕はないが、一八七六年の正書法会議以来、正書法問題の論ぜられるところ、つねにドゥーデンがあり、正書法改革の反対者ビスマルクの失脚後は、ドイツ語の統一の書法への戦いは、ほとんどドゥーデン一人によつて戦われてきた観さえあつた。彼の正書法辞典はいく度か版を改め、ついに、ドイツのみならず、オーストリア、スイスを含むいわゆるドイツ語三国の正書法の統一を確約するほどの権威をもつに至つた。そして初版以来の出版社であつた Bibliographisches Institut は、一九〇一年のいわゆるベルリン正書法会議によつて必要となつた同辞典の改訂に際して、ドゥーデン編集所を設け、正書法辞典編纂に本腰を入れることになつたのである。そしてドゥーデン亡きあと、E・ヴェルフィング、A・C・シュミット、テオドル・マティアス、オットー・バースラーらのすぐれた語学者が相次いで編集所に入り、ドゥーデンの遺志を継いで、『ドゥーデン』を名実ともにドイツ語表記の規準書に育てあげたのであつた。しかし一九四五年のドイツの政治的分割後、『ドゥーデン』は十三版(一九四七年)を最後の全独版として、以後ライプチヒとマンハイムに分れ、東西独立に『ド

『ドゥーデン』が出版されるようになった。一九五一年の東独版、一九五四年の西独版(十四版)、両者の基礎の上に立つ東の十五版(ホルスト・クリン編、一九五七年)<sup>(4)</sup>と『ドゥーデン』は相次いで刊行され、たびたび手が加えられた。そして一九六一年、ドゥーデン死後五十年を記念して、西独マンハイムからパウ・グレーベの編纂になる十五版が出版され、ここにわれわれは東西二つの『ドゥーデン』十五版をもつことになったのである。さきに『ドゥーデン』が東西に分裂したとき、東西両ドイツの言語的乖離が識者の注目を惹いた。新『ドゥーデン』においてそれはどのように発展しているだろうか。私は興味と期待をいだって「記念版」と銘打った新『ドゥーデン』のページを繰った。刊行以来すでに一年余り、いささか旧聞に属することを恐れるが、少しく紹介してみようと思う。

## 二

まず語彙について。新『ドゥーデン』は新語一万の採録をうたっている。東の十五版を無視して、再び十五版と銘打っているのであるから、勿論十四版を基にしたの新語であろう。もっとも、旧版の語彙は再検討され、改めて取舍が行なわれ、全面的な改訂版となっている。およそ語彙の選択は、辞書編纂の根幹をなすもので、その適否はそのまま辞書の良否につながる。本書の語彙が、正書法辞典として満足すべき段階に達しているか否かを判定することは、もとより私の能力と資格を越えるものであるが、マンハイムの新旧両版を比較し、また東西両十五

版については、A項全体にわたって細かく語彙を対比することによって、三者の間に意外に大きな差異のあることを知ったので、気づいたところを述べることにしよう。幸い、十四版と東の十五版との比較検討が、Aについてだけではあるが、ハッツ教授によって試みられているので、その結果をも参考にして新版の改訂ぶりを見ることにしたい。Aの項で、東独十五版に収められ、十四版に欠けていた比較的使用度の高い語 *abhaun*, *abknapsen*, *Abseits*, *Adventskranz*, *affig*, *anarchistisch*, *anästhesieren*, *aufschlüssel*, *auslassen* などは新版に収録された。また十四版が十三版から引き継いだものの *ハッツ* 教授が正書法辞典には不要と判断したものに ついて見ると *Abnattung*, *Abspülicht*, *Abundanz*, *Ahnenverlust*, *Approche*, *Arachis*, *Arachisöl*, *Aufmerker*, *ausrichtsam* などは新版で採られたが、*abasten*, *Abhängigkeitsverhältnis*, *Abnehmerland*, *achternig*, *Ahnenprobe*, *Ahnenlafel*, *Albus*, *Alkoran*, *Altman*, *Altheepätzchen*, *Altjungeferstand*, *am angeführten Ort*, *Amarschweg*, *Antriebsscheibe*, *Arminianer*, *arminianisch*, *Arminianismus*, *Aufmarschgelände* が残っている(これらは東独十五版には収められていない)。逆に、十三版にあって十四版で削られた語のうち、正書法辞典として収録されるのが望ましいとしてハッツ教授があげている二十四語のうち、*Abschnittzel*, *absotten*, *Aferréde*, *äks*, *Ammer*, *anken*, *Aurar*, *aussprechbar* の八語が新版で復活している。二つの十五版を比較して、まず気づくことは、

西独版に複合語が少ないというところである。正書法あるいは文法上、問題を含まない複合語や派生語は省く、という方針に異論はないけれども、そのため第十五版では、ablaufen, ablegen, abschlagen, abschließen, absteigen, anblicken, anbrechen, anhalten, annehmen, anregen, anschauen, antreten……などよく用いられる複合動詞が相当数脱落することになった。また他の複合語、たとえば altenglisch, Altsteinzeit, alleweile, Anhaltspunkt など欠けているが、いずれも重要語といえるのではなからうか。とくに、廃れつつあるとはいえず、地域的にはなお生かす allweil, alleweil などむしろ綴る alleweile や Anhaltspunkt と区別すべき Anhaltspunkt など正書法上も問題がありはしまいか。これらも、さきにあげた複合動詞も、anregen を除くすべく、東独版には収録されている。マンハイム版の新『ドワードン』は正書法辞典として徹するために、基本語彙の収載を断念しているように思われるのである。

語彙選択に政治的顧慮が働いていることも、また顕著なものである。Aktivistenehrung, antifaschistisch-demokratisch, Arakschejewregime, Arbeiterstudent, Aspirantur など東独版だけのものがあることは首肯しつつも、驚くべきことではなからう。Bundesrepublik をはじめ Bundeskanzler, Bundespräsident, Bundestag など「連邦共和国」に関する語は東独版から完全に閉め出されてしまった。これに対抗するように西独版でも東独的(あるいはソヴェト的)意味における Volk(人民)の

複合語をすべて無視し去っている。Volksdemokratie, volkseigen, Volkspolizei, Volksrepublik, Volkssolidarität 等々われわれによく知られた語を西独版に見出すことができない。いや、そもそも「ドイツ民主共和国」DDR の存在から認められていないのである。政治的偏向は、固有名の上にもあらわれている。正書法辞典として固有名をどこまで入れるか、その基準と限界を定めるのは困難であるとはいえず、新『ドワードン』がケネディを入れて、フルシチョフを省いたのは袈裟まで憎んだ感がありはしまいか。

一九四五年以後、ドイツでも外来語が急激に増加し、西独では英米語の、東独では特にロシア語の影響が顕著になった。英米語は東独にも多数流入したが、Party, Teenager, Playboy, Strip-tease などは、また一九五七年刊の東独版には載っていないし、Jarowisation, Towaritssch, Natschalnik などロマ系※の語は、『西ドワードン』には収められていない。

ここにあげた少数の例から見ても、もはやわれわれは一つの『ドワードン』で間に合やすというわけにはいかなくなったのを痛感するのである。

三

語義について。ここには一々例をあげないが、十四版と新十五版とを比べれば、改訂にあたって、多くの場合、語義の解説が拡大し改良されていることに気づく。しかし語義の種類が多い点、語釈の詳しい点では、西独版はなお東独版に一籌を輪す

る。もちろん道の場合もあるし、廢れたとか、稀れたとか、口語とかの指示となると、新『ドワードン』はまことに丁寧である。ところがオーストリアやスイスにおける意味とか職業語の指示においては、東独版がやや親切だといえよう。全く任意に、Fのはじめから二、三の例を示すならば、Fabulistは東版では「Fabeldichter; Plauderer」の二義があげられているが、西の十五版では、前半の本来の意義だけしかあげてない。しかしその語がすでに廢れたものであることを明示している。fachenは東独版では「[Feuer] schützen」であつたが、西の新版は「seltener für: anfachen」となつてゐる。fachsimelnは東版では「falsch」(zur Unzeit u. am falschen Ort Fach- u. Dienstgespräche führen)とある。これを西版は「zur Unzeit」Fachgespräche führen)と簡略化しているが、しかしこの語が口語であることを明らかにしているとどう都合である。

一九四五年來生じた東西ドイツの言語的分裂は、すでにしばしば、主として意味論的分野において、論議されているが、東西『ドワードン』をひき比べても、西ドイツの政治的対立がますますと言語の上に反映しているのである。西独版が「能動態」という文法用語としての意味しか与えていない Aktivが、東独版で、「社会政策的、経済的、文化的課題の実現のために集団的に働き、平均以上の能率を求めて努力する労働団体」を第一義としているのはよく知られているが、同様に「Aggressionは特に「不法の、または帝国主義的攻撃」であり、Annexion

は「特に帝国主義的行為によつて外国の領土を併合すること」という政治的に拡大された意味において用いられるのである。試みに東独版の Kosmopolitismus や Existenzphilosophie の項を見られよ。そこには、およそ正書法辞典に似つかわしくないほど幾行にもわたる解説が施され、マルクス主義的批判が加えられているのである。

西独版には、そのような政治的な語義の拡大、転換はないが、東西の政治的立場は、たとえば Äthiopien, Abessinien を東版は Staat とし、西版は Kaiserreich とするところがよくいちがいにあらわれているのである。

四

正書法辞典にとつては、語義の精粗は第二義的で、何よりも語形の正確な表示が本領でなければならぬ。東西ドイツ語における意味の乖離の傾向はまことに悲劇的であるが、語形態論的にも、すでに西の十四版と東の十五版との間にかんりのずれが生じた。そのずれが西の十五版ではどうなつてゐるのであるか。益々大きくなつたか、あるいは平均化され、統一の方向へ前進しつゝあるか。これはドイツ語の正書法におけるわれわれの最大の関心事である。統一こそ正書法のいちぢなからである。

まず複合語のつなぎの s について調べてみよう。Abtstabs, Altarsakrament, andachtsvoll, anhangsweise, anmutsvoll などは、西独十五版ではつなぎの s の省略は許されなかつた。

し東独版によれば、Abt[s]stab のやうにこれらはすべしsの省略が可能である。もとの adelstolz は東独版にあらうてsは省かれな。これは西の十四版ではsのなり adelstolz という形であったが、新十五版では改められ、東独版と一致した。十四版の Aronstab も新版では東独版と同じ Aron[s]stab に訂正された。右の例から西独十五版はつなぎのsを省かなら方針のよきに察せられるが、Altarsakrament については、マッケンゼンの『ドイツ語辞典』、『Der Sprach-Brockhaus』、クラッペンバッツ、ハニッシュ、タインニツ編『現代ドイツ語辞典』など最新のドイツ語辞典が、いずれもつなぎのsのなり形だけを載せている。一般に Altar の複合語にはsが入らなうに拘らず、この語に限つてsの挿入を主張する根拠はない。さうだらうか。sによる結合形がまだ広く行われなうとせば、sのなり形をよしとする新『ドゥーデン』自身の方針(同書七一頁)に反してまでも、sの重複した「美しくなり形」(ハニツ)に決定したのは納得しがた。

次に、-eln, -ern 動詞の派生名詞にきける弱音eの省略の有無については、十四版で見られた Anfehl[e]rung, Anford[e]lung などが新版では括弧が外された(Verbebrung, Verbesserung などとは別として) -erung に統一された。新十四版で省略の認められなかつた Aufrittlung, Auskiftelung 等、新版ではeを省らた Aufrittlung, Auskiftlung の添えられ、東独版と同じく、両形が認められることになつた。-eln 動詞の派生名詞は大体両形が認められてゐるが、Versammlung,

Verwandlung, Verzweiflung, Wandlung などのやうに省略形しか用ゐなうものゝ、Verzärfelung のやうに省略の認められなものがあり、一律に律するはむきなう。

また口語では、geh[e]n, seh[e]n, steh[e]n のやうに、長い幹母音のあとに、r の前の弱音eが脱落する現象がある。西独版ではそれを一々指示せず、文法篇(同書六九頁)で説明してゐるだけであるが、東独版は言語の生きた姿を尊重し、複合語については、eの省略可能を示してゐる(angel[e]n, abste[h]e[n] など)。ただ、seh[e]n は複合語にあつては極めて少数の例外を除いて、語尾のeは保存せられ、(ansehen, aufsehen, ausssehen; überseh[e]n, wiederseh[e]n)。次に Vögl[e]in, Aug[e]lein. 前者は東と西で一致するが、後者は西版では Auglein だけである。たしかに Auglein であり Auglein の方が一般的な形だと思ふ。Auglein とらう形を載せてゐる辞書はあまりなうのではなうか。その他語尾の省略については東西種々の差異が認められる。Aberglaube[n] (東) — Aberglaube (西), Amaran[t] (東) — Amaran[t]en (西), Amphibol[isch] (東) — amphibolisch (西), androgyn (東) — androgyn[isch] (西) など。また西版の anderte[ln]orts, anderte[ln]tags に対じ、東版は andernorts, andertags などは anderen Ortes (Tages) に指定してゐる。オーストリア形では Philologe, Soziologe など、log 形だけがあげられてゐる。その他西独版から姿を消したオーストリア形は少な

くない。

次に名詞の性 (Genus) について述べよう。一般に十四版では二つ以上の性を一つに整理統合しようとする傾向が見られたが、新版で修正されたものが多い。たとえば、十四版の *das Anerkenntnis, der Appendix, das Ar* など、新版では東独版と同じく、それぞれ二つの性、前二者には女性を、*Ar* には男性をも認めている。しかし、東独版で男性または中性名詞となつてゐる *Achromat, Aplanat* などは西独版では男性と定められたし、東の十五版が女性 (弱変化) あるいは男性 (強変化) と指定して注目された「女王蜂」(*Weisel*) は、西の十五版では依然男性名詞としてとどまつてゐるなど、なお両者のくいちがいはかなり残つてゐる。

変化についても、西独版は十四版における指定を新版でかなり補正して、東独版と同じになったものが少なくない。現行の独和辞典には十四版に拠つたものが多いので、修正を要するであろう。たとえば、*Ahning* の複数ほとんどは独和辞典が *Ahninge* としてゐるが、東西同十五版は *Ahnings* を並記してゐる。また *Albatros* の複数も、独和辞典の多くが *Albatros* としてゐるけれど、両『ワーデン』とも *Albatrosse* と決めてゐる。

さて、マンハイム版の新『ドワーデン』における名詞的品詞の変化の決定には、スウェーデンのゲルマニスト、E・イェンゲリニード氏の画期的な研究<sup>(7)</sup>が大きな寄与をなしてゐると思われ。たとえば「いたづら小僧」を意味する *Balge* は、従来

*Balge, Balger* の二つの複数をもちとされたが、新版で *m. od. s.; [e]s, Balger* と決められた。これはイェンゲリニード氏の研究に従つたものであろう。同様に *Schall* の複数も多くの辞書が *Schall, Schalle* の両形をあげてゐるにもかかわらず、新版では *Schalle* のみとしてゐる。*Boden* の複数についても、同氏は、現代作家四十九人から六十五例の *Böden* と一例の *Böden* (これはのち原著者が誤植と認めた) を蒐めた。たいていの辞書が二つの複数を示すとき、新版が *Böden* のみをあげてゐるのは、同氏の集めたデータによつたものに違ひない。このような研究成果は東の一九五七年版には採り入れられていないので、新十五版の有用性は高く評価されるべきであらう。

形容詞変化についても、イェンゲリニード氏の労作は新『ドワーデン』の判断決定に貴重な資料を提供してゐるのである。

## 五

語原と発音についても言うべきことは少なくないが、正書法辞典の本領ではないし、もはや紙幅も尽きたので他の機会を期さなければならぬ。ただ一言するならば、発音の指示、外来語の語原など新版は概して丁寧になつた。たとえば *Favorit, Hehner, Katholik, Kritik, Musik* (ハクセントをゆつて) などの長い *i* が短くも発音されることが明示されたのは注目に値するであらう。勿論、逆に西独版の方が簡単である場合も多々ある。とくにオーストリアの発音は東独版がくわしく、たとえば *China* [k. j. Fakr [k. i: t. ], Kai [ke j] など) の

